



Gay surrogacy and the family without woman.

ゲイ代理出産と女性のいない家族

Interviewee

Dr. Michael Nebeling Petersen

Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門分野、関心領域を教えてください。

ジェンダー研究の分野で博士号を取得し、カルチュラルスタディーズとカルチュラルコミュニケーションの分野で長い間、仕事をしてきた。ジェンダー研究の分野で教授の職についている。同性愛の政治、文化、解放について、つまり「政治的権利を巡る文化政治(cultural politics of political rights)」に焦点を当てている。博士課程の研究中に、生殖補助医療と渡航生殖に興味を持つようになった。その理由は、この現象が、ゲイライツと生殖補助医療のポリティクスが交わる主要な領域であるように見えたから。自分はゲイだが、代理出産を依頼したことはない。結婚して夫がいるものの、子供を持つことや生殖補助医療を利用したりすることには今まで全く興味がなかった。自分の関心は、子供のいる家族を持つことが、文化的にこれほど重要であると思われている中で、それが同性愛者の文化や解放とどのように重なるかを理解すること。

これまで生殖補助医療の分野で複数のプロジェクトをやった。1つは、海外で代理出産を依頼したデンマークのカップルに焦点を当てて、国境を越えた代理出

産に関する研究を行った。もう1つは、凍結技術(cryotechnologies)であり、それが文化的および政治的のどのように理解されているかに焦点を当てた。

3つの研究を行ったが、その手法はいずれも実証的研究。1つは国際養子の研究で、文化分析や言説分析を行い、2007年に完了した。2013年から2015年まで、国境を越えた代理出産に関する大規模な民族誌的研究を行った。この研究では、デンマークとスウェーデンのメディア描写および政治的言説について、インタビューと言説分析を行った。

ヨーロッパ以外で代理出産サービスを利用した、または利用しようとしている約20組のデンマーク人カップルに各々2~4時間の詳細なインタビューを実施した。大半はゲイの男性カップルだった。オンラインの代理出産フォーラム(特に、FacebookとInstagram)の参加者の相互作用を1年以上観察し、オンラインの民族誌を書き上げた。オンライン上の交流では、子供を育てる方法、代理母とつきあう方法、してはならないこと、などのトピックが話し合われていた。

Instagramを題材にビジュアルな民族誌を完成させた。この研究では依頼親をフォローし、彼らが代理出産で作った家族をオンライン上でどのように描いているかを観察した。

過去の研究から収集したデータを使用して、デンマークでIVFを受け、余剰受精卵を保管している12人のデンマーク人女性にインタビューし、女性たちがどのように受精卵を理解しているかを明らかにした。所有者がそれらをまるで生きもののように扱っている様子や、親族のような感覚を持っている様子について観察



し、受精卵をめぐる意識について論文を書いた。

Q. Gay surrogacy について考察したこれまでの研究について、教えてください。

国境を越えた生殖をめぐる文化政治に関して、重要なポイントが2つある。

1)国境を越えた代理出産は、さまざまな不平等の中で可能になっている。現存するさまざまな形態の不平等は、国境を越えた代理出産と交差している。依頼者の主観の中では、それは特権などでなく、周縁化された経験だ。依頼者は、亡命(in exile)や、生殖難民(reproductive refugees)などの言葉を使って自分たちの経験を説明しようとする。代理出産をめぐる世界の法律が急速に変化していく中で、ゲイの依頼者は、まるで世界中を駆け巡っている狩人であるかのようだ。ゲイカップルは、母親が存在しないので、自分たち家族が受け入れられるために相当な努力をしなければならない。

2)特権がないというこの感覚は、ゲイ男性に、不平等のもう一方の側である代理母、卵子ドナー、および依頼者の関係、および、それをどのように思い描くかについて、倫理的権利を与える。この関係は不平等によって可能になっている。代理母よりも収入が大幅に少ない依頼者はまずいない。インタビュー対象者のうち、白人ではない依頼者は1人だけいたが、代理母はそうではなかった。

ゲイカップルらが倫理的な複雑さにどのように対応するか関心がある。彼らは、自分たちとはまったく異なる立場に置かれた女性のサービスを利用しているということを認識している。依頼者は貧

しい国に渡航し、そこから赤ん坊を連れて帰ってくる。これは植民地時代の構造を反映している。植民地主義者、人種差別主義者、ミソジニー主義者である彼らが、貧しい女性がより良い生活を送るために何が必要かを想像することで、自分たちを納得させている。依頼者は、国内で必要なプロセスにアクセスできないため、インモバイルだと感じている。しかし、客観的に見ると、彼らは家族を作るために世界を横断しているので、ハイパーモバイルだ。いちばん重要なことは、特権が欠如しているという感覚は間違いだと知り、むしろ自分たちは特権を持っている側なのだということに気づくことだ。

主要な発見が得られたのは、子供を作り、親族や家族を作ることの重要性を巡って。それは、自分が研究を始めたときの主な関心事だった。なぜ子供を持つためにそんなに多くのお金を払うのか？デンマークでは、生殖補助医療で一通りのプロセスを試した後、代理出産は最後の選択肢となる。なぜそのような絶望と欲求不満を経験するのか？子供を持つことは、政治的にも性的な意味でも、一人前の市民になるための中心要素だと見なされているように思われる。子供を持てば、プライベートな生活が完璧であると見なされる。(不妊などではない限り)子供がいない生活を納得するのは非常に難しい。ゲイの男性は長い間そういう状態に置かれてきたが、現在は利用可能なオプションがある。

Q. 研究対象者との信頼関係(ラポール)を築くことができましたか？



カリフォルニアにあるエージェントでインタビューを行っている間、信頼関係を築くのに苦労した。それは、自分が白人の同性愛者であることに由来していると思う。

Q. 代理出産は社会的に controversial な問題です。代理出産を依頼するゲイカップルは、倫理の問題についてどのように考えていますか？

倫理的な思考方法は、選択した目的地によって明らかに異なっている。インドやタイ、または米国で代理出産を選択する際に、さまざまなカップルが倫理的懸念事項にどのように折り合いをつけるかについて論文を書いたことがある。代理出産コミュニティの中には階層化がある。米国に行くことは、最も倫理的な選択（「最良の」解決策）と見なされている。女性は適切にスクリーニングされていて、必ずしも「貧しい」とは限らないと考えられている。実際のところ、アメリカの代理母は、快適な生活を送るためにお金が必要な下層階級の女性だ。ゲイの依頼者は、「彼女の選択をジャッジする私たちとは何者か」と聞く。彼らはアメリカ人代理母を完全な人間、自分で選択できる女性とイメージし、このイメージを使って自分たちの選択を正当化する。

タイ人の代理母を依頼した1組のゲイカップルと、インド人の代理母を使用した2組のゲイカップルにインタビューした。彼らは、代理母は何もできない貧しい女性であり、この稼いだお金は、最終的に代理母の子供たちの世話をするのに使われると考えていて、依頼者は「彼女たちはこれ以上の良い仕事を見つけるこ

とはできないだろう」などと言って自分を正当化するだろう。こうした外部要因を動機づけとして語っていた。それは、植民地主義者とミソジニー主義者によるフレーミングだ。代理出産は、貧しい女性にモビリティを与える手段として描かれていた。彼らは、女性たちには知識がなく、選択肢がない。そして個性や感情もない、だから知性が少ないと描いていた。デリーののような大都市の高級ホテルで代理母と会った後、依頼者は、「彼女がデリーに来たのは初めてだ」などとコメントをする。これらの例は、アメリカ人の代理母のナラティブと自由意志のロジックとは正反対のものだ。

Q. Gay Dads にとって、母親、「母性」、母親と子供の絆は、どのように理解されていますか？

女性のいない家族を作ることは徹底的に新しいこと。子育てと女性らしさという概念は、母性と強く結びついている。ゲイカップルは、これまで誰もやったことのない文化的な仕事(cultural work)をしていることになる。

2013年にプロジェクトを開始したとき、たくさんのブログを読み、多くの新しい言語が発明されているのがわかった。ゲイ男性の両親へのインタビューから、「母親」(mother)が文化的な概念であることを理解するようになった。ゲイカップルの家族では、「母親」の存在は彼らの親としての正当性への脅威と見なされている。代理出産で親になったゲイ男性に「あなたの子供には母親がいますか？」と尋ねた。すると彼らはいつも強くノーと答えた。しかしそれから彼らは母性に



についての議論を始めた。彼らは、子供には母親がいないことを断固として主張していたので、これは幾分矛盾していた。

デンマークでインタビューをしたゲイカップルは、代理母のことを常に「Carrier」と呼んでいた。彼らは「母親」という言葉を使うことに反対した。なぜなら、それは(母)親であることを自分たち以外の人物に割り当てることになるから。家族という概念において、母親は1人だけであり、これはその子供にとって母親以外の重要な親族を否定することになる。

ゲイの両親は、まともな家族として生きるために母親の概念を根絶しなければならないようだった。もし母親がいたら、ゲイの父親のための場所がない。2人の父親を持つことが母親を持つよりも優れている理由を正当化するために、言語を使用していた。そのようにして、家父長制とミソジニーの枠組みが現れていた。

Q. 新しい生殖技術は、LGBT/ゲイコミュニティにとって朗報でしょうか？ 子宮移植を受けて子供を産みたいというゲイカップルはいるでしょうか？

女性の存在や役割を完全に取り除くことができるのであれば、デンマークのゲイカップルたちは、新しい生殖テクノロジーを利用するだろう。「市民として完全になるためには子供を持たなければならない」というのはデンマークの強固な文化的構造である。したがって、子を持つことは贅沢なことだとは思われず、強力で具体的ニーズとなる。「完全」、

「完璧」になるために、子供は必要不可欠な要素と見なされる。この考えが存在し、アクセスの不平等がある限り、もっとラディカルな生殖補助医療を可能にするために最適な仕組みが出来上がる。スウェーデンでの子宮移植に関する論文を書いたことがある。通常、子を産めない娘のために子宮を提供するのは母親だ。子宮移植や代理出産が想定される事例についての言説分析を行なった。スウェーデンは、代理出産は「悪い」ことだと見なされている、北ヨーロッパではよくある国の一つ。代理出産は搾取的であるとフェミニストは強く主張している。代理出産と比較すると、子宮移植は「道徳的に正しい」、利他的な選択として理解される。子宮を提供する女性は家族だから。子宮移植は、国際養子縁組と代理出産に対する優れた代替策だと見なされている。

Q. 同性婚をして、その後、親になりたいと願っている LGBT の人たちが望んでいるのは、これまで異性愛カップルが営んできたような核家族と同じものでしょうか？ それとも違うものでしょうか？

LGBTQ の人々は、異性カップルと同じような核家族形態を望んでいるが、しかし、同じになることは決してない。そこに研究心をそそられる。インタビューしたすべてのゲイカップルは、異性カップルのように遺伝的につながった家族を望んでいたことは間違いない。それは生殖ヒエラルキーの最上位にあるものだ。なぜ彼らがレインボーファミリー（親子関係が女性とのロマンチックな関係に結びついていない）を選ばなかったのか尋



ねたが、彼らはすべて「本当の家族」、つまり遺伝的につながった、伝統的な異性愛者の核家族の模倣を望んでいた。

片方の親が遺伝性疾患を持っている可能性がある場合を除いて、インタビューしたすべてのゲイカップルは、どちらが生物学的父親になるかを決定するために長い議論を経ている。彼らは遺伝的家族を作りたいと思っているが、現実には片方の親だけしか遺伝的親にはなれない。カップルは、想像上の他人（自分の親族）に選択を「アウトソーシング」することで、誰が父親になるかを選択することがある。交互に遺伝的父親になる場合

もある。交互に遺伝的父親になる予定だったカップルにインタビューしたところ、最初の子供の非遺伝的父親は、その子供が、彼が愛するパートナーに似ていることを気に入っていたので、2番目の子どもを持つとき、彼は次に生まれてくる子供が、その子に似ていることを、自分が遺伝的父親になることよりも優先した。このプロセスには深い意味がある。同様に、非遺伝的父親に似た卵子ドナーを選ぶ人もいる。彼らは、それによってつながりを作ろうとしていた。

Q. 今進めているプロジェクト、今後やりたい研究は？

今は、生殖の研究をやめている。凍結保存した受精卵に関する研究を終了し、別の研究に進もうとしている。今はこのテーマに興味を持っていない。

現在、デンマークのエイズの文化史に取り組んでいる。これは歴史的なアーカイブプロジェクトで、民族誌的研究では

ない。この作業は、ウイルスと伝播がデンマークの文化にどのように影響したかに焦点を当てている。

(2021年12月)



Dr. Michael Nebeling Petersen [Link](#)

University of Copenhagen 教員

研究関心はジェンダー、特にセクシャリティ、ジェンダー、人種と国家の交差。現在はゲイカルチャーと歴史、エイズの文化史について取り組んでいる。デンマークジェンダー研究協会理事。

論文：

M Nebeling Petersen 2018 Becoming gay fathers through transnational commercial surrogacy. *Journal of Family Issues* 39 (3), 693-719

M Nebeling Petersen 2018 The mediation of commercial transnational surrogacy. The entanglement of visual, colonial and reproductive technologies. *Queer(y)ing Kinsip in the Baltic Area*.

M Nebeling Petersen et al. 2017 Dad and daddy assemblage: Resuturing the nation through transnational surrogacy, homosexuality, and Norwegian exceptionalism. *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 23 (1), 83-112